

東京大学総合図書館蔵『月清集攷』翻刻と紹介

板野 みずえ

はじめに

東京大学総合図書館は『月清集攷』と題する岡本保孝の
手になる『秋篠月清集』の注釈書を有する。『月清集攷』
は東大本、国立国会図書館所蔵本、さらに国立国会図書館
所蔵本を転写したと考えられる京都大学附属図書館蔵本
と、現在三本が確認され、うち京大本は吉澤義則編『未刊
國文古註譯大系』第七冊（帝國教育会出版部、一九三七年）
に翻刻紹介されている。作者の岡本保孝（一七九七—一八七
八）は江戸後期から明治前期の国学者・漢学者。和・漢・
仏典に及ぶ幅広い知識に基づき数百にのぼる著作を残して
おり、平安・鎌倉期の私家集に関しても『長秋詠藻備攷』『山
家集攷』などの著作がある。『月清集攷』は国立国会図書

館蔵『況斎叢書六十五』所収の『況斎著述年譜』によれば
天保元（一八三〇）年の著作。

中世私家集の古注釈は勅撰集の注釈書に比べると多いと
は言い難く、旧来藤原良経の家集である『秋篠月清集』の
古注釈に関しても専ら『六家抄』のみが示されてきた。『月
清集攷』の存在に目を向けることは『秋篠月清集』研究、
さらに中世私家集に対する古注釈研究の展開に大きく資す
るものと思われる。また現時点で唯一の翻刻である『未刊
國文古註譯大系』の翻刻には誤りも多く、三本のうち最も
古いと考えられる東大本を底本として翻刻し、国会図書館
本・京大本との校異を示すことは本文整理という点におい
て意義のあることと考える。

一、書誌

【翻刻底本】

・東京大学総合図書館蔵『月清集攷』（E31・2365）。写本、一冊。帙入。仮綴（紙縫綴）本。縦二十四・〇糎、横十七・〇糎。共紙表紙の左肩に外題「月清集攷 完」を打付書する。この外題の右肩には同筆で「一一一十七」と記す。内題ナシ。本文料紙は雁皮紙。墨付十三丁、一面十四行書き。抹消線の傍記は本文と同筆である。

表紙下部中央に「四十五」と記した貼り紙。同様に最終丁裏、下部中央にも貼り紙を下げ、「月清集攷 十」（「十」は朱書）と記す。また、表紙の紙縫綴右部に「天保元年十二月」という書き入れが、そこからやや間をあけて下部に朱書で「六十五ノ十五」と記す。

蔵書印は「東京帝國大學圖書館」（表紙裏、縦五・八糎、横五・九糎、朱方印）、「芳垣園奇賞」（本文第二丁表、同十二丁裏、縦四・九糎、横一・四糎、朱方印）、「岡山」（本文第七丁裏、同十二丁裏、直径八・〇糎、黒丸印）、「東京帝國」（本文第十二丁裏、直径一・二糎、朱丸印）。

第十二丁には『四庫全書総目提要』の「白香山詩集」の一部を筆写するも、その上から全体に大きく墨で×印をつ

ける。十三丁表の左肩には「公羊傳注疏攷」と打付書し、上から二重線で墨減するが、以降の本文はない。「未卒業」と付されていることから、当初『月清集攷』に続けて執筆予定だったものの完成には至らなかったか。実際、現在残されている岡本保孝の著作類の中に『公羊傳注疏攷』と題するものはない。

保孝自筆本と明らかな書物の中で、今回静嘉堂文庫蔵『岡本況斎雜著』（函86・架4）内の『大鏡系譜・増鏡考』『永久四年百首考・新撰六帖考』『後拾遺・金葉・詞花・千載存疑』の三本を参照したが、東大本『月清集攷』の筆跡と同筆と認められた（本稿末に付した図版参照）。表紙紙縫綴右部に認められる「天保元年 十二月」の書き入れが『況斎著述年譜』に『月清集攷』の成立年と示されている年と合致することも東大本『月清集攷』が保孝自筆本であることを補強する材料となる。なお、今回参照した静嘉堂文庫蔵『永久四年百首考・新撰六帖考』には本書と同じく「芳垣園奇賞」（縦四・九糎、横一・四糎、朱方印）の印記があるが、このことからこの蔵書印を持つ加藤直種が一時期保孝自筆本をいくつかまとめて所蔵していたことが推察される。

【校合本】

・国立国会図書館蔵『月清集攷』（189・80・243、況

齋叢書」所収本)

写本、一冊。袋綴。縦二十三・八厘、横十七・〇厘。黄
槳色表紙左肩の題簽に「況齋叢書二十六」と記す。表紙中
央の貼り紙に、右から「月清集攷、長秋詠藻備攷、六書雜
攷、古言梯補遺」とある。「帝國圖書館藏」の型押し。内
題ナシ。頭に遊紙一枚。「長秋詠藻備攷」、「六書雜攷」、「古
言梯補遺」との合写で、「月清集攷」部分の本文丁数は十八
丁。本文料紙は楮紙。一丁十行書き。蔵書印は「帝國圖書
館藏」(本文第一丁表、第二丁表、縦四・七厘、横四・七厘、朱
方印)「明治三三・六・二五・製本」(本文第一丁表、直径二
・一厘、朱丸印)「明治三一・一〇・二五・購求」(本文第一
丁表、直径二・一厘、朱丸印)。

・京都大学附属図書館蔵『月清集攷』(『況齋叢書』所収本)
写本、一冊。袋綴。縦二十六・六厘、横十九・〇厘。黒
紙表紙左肩の題簽に「況齋叢書二十六」と記す。内題「況
齋叢書 二十六」。内題右に、右から「月清集攷、長秋詠
藻備攷、六書雜攷、古言梯補遺」。「長秋詠藻備攷」、「六書
雜攷」、「古言梯補遺」との合写で、「月清集攷」部分の本文
丁数は十八丁。本文料紙は楮紙。一丁十行書き。印刷野入
用箋使用。用箋柱題「京都帝國大學圖書館藏書」。

蔵書印は「京都帝國大學圖書館」(内題裏、縦四・三厘、

横四・三厘、朱方印)、「1744557/大正6・5・12」(内
題裏、縦経三・二厘、横経四・四厘、薄紫棹円印)

二、翻刻

〔凡例〕

・東京大学総合図書館蔵『月清集攷』の本文を翻刻し、私
意に清濁を分かち、句読点を付して読みやすくした。踊
り字記号は残さず、それぞれ該当するかなを当てはめ翻
刻した。

・各行冒頭に私に算用数字を付し、改行ごとに斜め線で区
切った。その下には漢数字で『秋篠月清集』の歌番号(新
編私家集大成CDROM版)に拠る)を付し、当該語注の対
象となる歌を示した。丁数は(一オ)(一ウ)の形で改丁
ごとに付した。

・墨減により判読が困難・不能な文字は■で示した。

・抹消線と傍記は、底本に見られる表記をそのまま反映し
た。

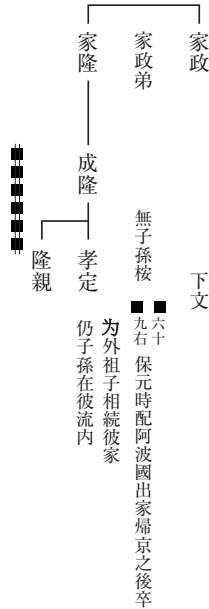
(二丁オ) 藤原良経ヨシネ 後京極 良経公ノ祖 ○新古今の序は良経公カ、レタリ

京極ト云フ／読史餘論上土御門活字 八十 建永元年三月為盛所殺

／清巖茶話ウ廿九卅七にて薨し給ひしかど生得上手にて

(二丁ウ) 道長 曾孫 関白師通公次男家政

尊卑分脉 ■六



(二丁オ) 1月清集一／2(七) 浪と花とのみゆるなるべし
初オ ことわり聞えず／3(九) 秋はまた鹿の音つげし ま
たといひてつげしト云、かけ合いかが／4(一二) 雲ぞ雲
井^二上ノ雲は花の雲也／5(二三) 御ゆきなるらむ
みゆきは御幸ノ事ニハアラズ。雪の事也／6御ノ字みト改
ムベシ／7(二三) 霞行やどの梢ぞ^ウ途中にてわが家
をかへりみたるさま也／8(二六) けちかさ 後撰恋五／
9(三八) 吹風や空にしらする 風がたれにしらするにか。
おだやかならず／10(四九) 猶ちらじ 三ウ 猶 後世
のツカヒサマナリ／11(五〇) 残し松の 桜の青葉になれ
るさま／12(五六) 月影の残る草なき 草はくまの誤。類
句ニクマトアリ／13(五九) 月よりうづむ秋のしら雪 よ
りノ詞いかが／14(六三) 沖こす月のかけかな 浪のこゆ
るなれども月ばかりのやう

(二丁ウ) 1におもふと也／2(六五) ひとつになせる 心
におもひ出ス事也／3(七二) すずのしのや 四ウ す
ずトハサノ事也／4(八四) さらしなや心のうちにたづ
ぬれば^五三ノ句おもひやればト云事也。此比／5の取
なし也。古今にわが心なぐさめかねてさらしなやノおもむ
き也／6(八六) 心つくすな有明の月 月に我に心をつく
させるなと云事ヲカクイヘル／7ナリ。古今の有明の月を
まちいづる哉もまちいだしつる哉と／8イフベキ例ナルヲ
／9(八九) ながめにうかぶ五月雨の空 めにうかぶト云
イ^ヒカケニテ五月雨ヲ源に／10そへて也。さて秋と夏とを
かけ合する也／11(九九) 長月の有明の月の^五古今のい
まこんといひしばかりの哥を本哥にて／12よめる也／13
(二〇三) そとも^六萬葉一 藤原宮御井歌 背友乃大御門原署
解 成務記／14(二〇五) もしほやく 煙かとむろのやしま
をみしほどにやがても空の霞ぬる哉
(三丁オ) 1(二〇六) さればこそ^{オ六}アレト云詞ヲコメテ
ミルベシ／2(二三五) 月影わたる^{ウ七}わたるハわくるに
はあらざるか／3(二四二) しぐるともなき 此上にしぐ
るれどもいささかにてト云意ヲ含テミルベシ／4(二四四)
過來ぬる^{オ八}過ぬるかト玄玉集にあり。千載過ぬるか夜
はの／5ね覚のほととぎす声は枕にあるここちして／6

(二五二) しらぬ山の雲を^オ 漢高の故事／7 (二五八) な
 ほかよへうつの山べの^ウ 伊勢物語ノ哥より／8 (二六
 ○) きえがたきしたのおもひは けぶりはたてども富士も
 浅まも火はなきに／9 おのれはおもひ有と也／10 (二六一)
 我も昔のごとはでやは ごとと濁てよむべし／11 (二六
 三) 廣瀬川^オ 萬葉七三十八丁廣瀬川袖つくばかりあさ
 きをや／12 こころふかめて我おも^オらん／13 (二六四) 石
 はしる水やはうとき 二ノ句考べし
 (三丁ウ) 1 (二六五) あすか川 上ノ句は契の浅くなるを
 いひて下句に深をいへり／2 (二六八) うしとも今は 自
 ラあきらめて／3 (二七二) 竹のはやし 金光明経にみゆ
 るよし拾遺集^{雜上} 季吟抄にいへり／4 (二七二) すず 竹ノ
 事也／5 (二八七) けふを初せの けふ初て初瀬へ遁世し
 たる／6 (二八六) 長夜の朝日まつまの 弘法大師の故事
 入定して弥勒を待也元^{享尺書にみゆ}／7 (二八八) 難波えや 聖は聖徳太子
 也。天王寺にての哥也／8 (二九四) 友さる^ウ 友千鳥
 などの友也。さるもむれて遊ぶ物也／9 (二九五) 心有し
 都の 心ありしとおもひし都の友も、今おもへば心なき岩
 ノ木ぞと也／11 (二九九) おくの友舟[○] くはきノ誤。類
 句にきトアリ／12 (二〇七) 心の空にあまる物かは^{十一} 物
 かいふ事也。疑のかなり／13 (二二三) 白波の^{十一} 万葉^ウ

よの中はなににたとへん朝びらきこぎいにし／14 舟のあと
 なきが^{拾遺集に}ごと^拾も此哥入^{のしらなみ拾}
 (四丁オ) 1 (二二七) あはれいかに^{西行} あはれいかに草葉
 の露のこぼらん秋風立ぬ／2 宮木のの原もおなじ時代に
 て似たる哥也。古今みさむらひ／3 みかさともをせ宮木の
 のこの下露は雨にまされり／4 (二二六) つれもなき人や
 はまちし^{十二} 古今我やどは道もなきまであれにけり／5
 つれなき人をまつとせしまに／6 (二二三) あやめを結ぶ^{十二}
 十二 あやめを枕にゆふ事この比よりなるべし／7 (二三
 四) 蓬が柚 好忠が哥より／8 (二三九) ながれぬ波 い
 かがさわがぬとかうごかぬとか云べし／9 (二四〇) 昔の
 薄^{古今} 君がうゑし一むら薄虫のねのしげきのべともなり
 10にける哉／11 (二四三) はるの川かぜもと^{十三}はらふ也^オ
 もとは下トアリテしたトよむべきを／12 後にしたトヨム
 事トハ心ツカデもとト改メタルニハアラザルカ／13 (二四
 六) 人のつらさを 此下に詞をこめてみるべし／14 (二五四)
 秋なれば^{十三} 此哥解にくし
 (四丁ウ) 1 (二五八) うきす にほのあしなどにてこしら
 へたる巢也。水にうきてよそに流行／2 くを旅寝とはいふ
 也／3 (二六〇) 雪のみ山に鳴鳥の^{十三} 雪山ノ故事／4 (二
 六三) 心しらるる猿のみさげび 猿も物思ふかとその心の

しらるる也／5 (二六八) ふすゐの床 後拾遺恋四和泉式部／6 (二七〇) 月の鼠 高光の哥有とおほゆ／7 (二八八) さと神楽^{十五} 禁裏にむかへて／(8頭注、補入記号あり) 哥合百首^{十六} 六百番哥合也／8 (三〇六) むさし野にきぎすもつまや^{十六} 伊勢物語の哥にあたりて、もといへり／9 (三一六) 夏草のものと^{十七} もとは下也^{シタ}／10 (三一七) あふひ草 逢^使といひて、さてあふひ草はうくもの故川なみヲとり出たるまで也／11 (三一八) うかひ舟 舟ヲウカブル事ニイヒカケタルナラン／12 (三二九) 山ほととぎす 一声の空 貫^之夏の夜のふすかとすればほととぎす／13 なく一声にあくるしのめ／14 (三三四) 秋かけて^{十八} 秋のけしきをみせて也。兼ノ意也
(五丁オ) 1 (三三五) うつの山十九オ 伊勢物語^{あづまくだり}／2 (三三六) 雫も色や ははそにあてて、もト云也。ははそのもみぢしたるに／3 よりて／4 (三三九) しぐれをいそぐ 暮秋にて人の袖のぬるるをいふ也／5 (三四三) みぞれのふるさと^{十九} 古に降ヲ兼／6 (三四四) せり川の波も昔に 後撰雑上さがの山みゆきたえにしせり川／7 のちよのふるみち跡は有けり／8 (三四七) たえだえたて^廿るオ たて^廿るははへて有事也 後拾遺 さびしさにけぶり／9 をだにもたたじとしてしばをりくぶる冬の山ざと／10 (三

五四) 杉の梢に^廿 古今^{わか庵はみわの山もと} △恋しくはともらひきませ枕たてる門／11 (三五五) きふね川 恋ライノル所也。後拾遺神祇貴布祢の哥／12 (三九二) 君ゆへもかなしことの^{卅三} 文集五絃彈ノ詩^{詞花雜上ねをこひつつもな}／13 (三九三) まろがまるね^{卅三} 拾遺／14 (三九九) としふかき入江の 琵琶引(五丁ウ) 1 (四一〇) み山に消る^{廿五} るはしと有たし／2 (四二四) 光はもらで^{廿五} 玉水はもる也／3 (四二七) 岩しく袖に 岩をかたしきていぬる事也／4 (四三〇) 萩原や萩ノ誤也。穂が花也／5 (四三七) くくるしら浪^{廿六} これはくくる也。清也。ちはやふるノ哥を誤解たるにや／6 (四四三) 雲にぞかはる^{廿六} 雪を月にみたてたる也。ただ雲有斗が真の月とは異也と也／7 (四四四) しもとゆふかづらき山 古今 しもとゆふかづらき山にふる雪のまなく／8 時^なくおもほゆる哉／9 (四五五) まけぬる人^{廿七}やオ るはとの誤。類句に既にトアリ／10 (四六六) くれをまつ空もくもらじ^{廿七} くもれば日暮んかとのみ有^{アレ}ど／11 (四七八) 八十うち人は^{廿八} 宇治川ノ事也。されどうちまかせて八十うちと／12 いふ、いかが／13 (四八〇) 誰とみるらん^{廿八} とはかノ誤。類句もあやまれり
(六丁オ) 1 (四九〇) 神ちの山^{廿九} 大神宮のうしろの山也／2 二の巻／3 (五一二) 龍田山^ウ 山は川ノ誤。類句

もあやまれり／4 (五四二) もりかはる オ三 時雨と月と
もりかはる也／5 (五五二) それもなほ風のしるべは 古今
しら波のあとなき方に行舟も風ぞ／6 (五八一) 隣となれ
るすぎの庵哉 ウ四 遠くおもひたるすぎの庵を今は也／7
(五九八) さほ川 ウ五 春日山の麓を流るる也／8 (六二五)
心あてにながめし山の梅の花 オ六 梅は桜なるべし／9
(六一七) 主もなき 萬葉 まつらさよ姫の故事／10 (六三
二) にほの水うみ オ七 近江海ノ事也／11 (六四二) ほしや
初つる ほし二千星をかねたり。初は侘の誤ナラン／12
(六四六) 秋風のむらさき ウ七 朗詠 菊 蘭蕙苑嵐摧紫後
云々
(六丁ウ) 1 (六五三) 清見がた 波のうつときはありく事
なくて、波のひまひまに磯／2 づたひにありく。されば波
の関を守さまにも哥によめり。／3 今は山の上より通ふ也。
磯づたひといふは左の事也／4 (六五四) 久かたの月を宮
人 をはのノ誤。類句にのトアリ。かぐや姫ノ事ナルベシ
／5 (六七七) 氷室の山に オ九 御室の誤 古今かみがき
のみむろの山の／6 (六八五) 月をばいでて オ九 疑／7 (六
九二) 星の光を仰ても 三公の位にみづから給ふ故に／
8 (七一〇) 春はまたいかにとはまし 本哥詞花秋君すま
ばとはまし物をつの国の／9 (七二七) いさり火の昔のひ

かり いせ物語 はるるよのほしか川辺のほたるかも／10 わがすむか
たのあまのたく火か／11 (七九五) はこやの山の オ十四 後鳥
羽院／(12頭注、補入記号あり) 院第三度百首 千五百番哥
合也／12 (八〇二) 槇 オの葉白き春風ぞ吹 ウ十四 白き可考／13
(八〇六) 霞よりふるこのめ春雨 ウ十四 霞はみどりなるもの
故かくいへる也／14 (八〇九) 秋ぞのこれる オ十五 秋のおも
むきがさすがにのこれる也
(七丁オ) 1 (八一四) うす紅に今朝ぞかすめる オ十五 花のち
るにあたりてうす紅といふ、いかが／2 (八一六) 打なが
め春の三月の 古今 おきもせでねもせで春をあかしがた／3
(八一九) 手に結ぶ石井 古今 むすぶ手のしづくににごる山の井
の／4 (八二六) 夏の夜わたる ウ十五 夏の夜わたる月ぞかく
るるト云哥ヨリ出タラン／5 (八二七) 玉まぐくず マク 卷ト
散トヲ兼タリ／6 (八二九) ちりをこそ 古今夏本哥あり
／7 (八三八) たび人の入野の尾花 いつしかいもの手枕
をせんト哥の取レリ／8 (八四六) かち人の道 万葉 山しろ
のこはたのさとに馬はあれどかちより見かく猶／9 おもひ
かねて／10 (八七〇) 玉ぐしの葉 ウ十七 榊也／11 (九〇三)
霞よりつつみかねたる梅がえの オ十九 梅がかの誤なるべし
／12 (九〇四) 雲まより ウ みえてト句ヲタシテミルベシ。
久かたのみどりの空の雲／13 まより声もほのかにかへる雁

がね、のより也

(七丁ウ) 1 (九一二) 月と雪との十九 戴安道ノ故事 / 2 (九

一二) 郭公なく夜は 後撰 花橘のにはふあたりを / 3 (九

二二) 袂ならはす萩の下露 オ 涙也あすわけん てぬらす ■ ■ ■ 萩

の露をこよひ / 4 なみだにならはず也 / 5 (九二七) 月残

る古郷人の浅ぢふに 古郷人が月残る浅ぢふに / 6 (九三

五) まきの戸をあさけ ウ 廿 あさあけ 朝開 ヲカネタリ /

7 (九三六) あさつま 地名也湖水にむかひたる所なる

べし / 8 (九五九) 鈴鹿川 廿二 此比伊勢へ勅使にて下られ

しこと有べし / (9 頭注、補入記号あり) 御山いでて花のか

がみ 古今春上 としをへて花のかがみとなる水はちりか

かるをやくもるといふらむ / 9 (九七二) はしにしたたる

廿三才 朗詠 落葉 空階雨滴 / 10 (九七五) ひとりかも廿三ウ

本哥によりたるなれども、ひとりのみト有ベキ処也 / 11

(九八二) その色におもひ分とや 廿四 コレハ下 四段ノ下知也 ■ ■ ■ ねはと

しのそゆ ■ ■ ■ の ■ ■ ■ へり / 12 (九八三) 旅人を送りし

琵琶行 / 13 (九九二) いはばや物を 廿四 雨やまぬ軒の玉水

つぶつぶといはばや物を心ゆくまで ウ

(八丁オ) 1 卷三 / 2 (二〇〇三) このごろは谷の杉むら雪

消て オ 上下掛合いか / 3 (二〇〇五) 雪は残り花も匂

はぬ山里に 春たてど花も匂はぬ山里は物うかる / 4 ねに

鶯ぞなくといふ本哥によれり。しかみざれば、二ノ句の

も、お / 5 だやかならず / 6 (二〇〇七) 雪さえてけふま

で花の枝に残れる ウ 残はこもノ誤。類句にこもれりと

有 / 7 さて類句三ノ句を雪消てと有はワろし 夫木春一にもこもれりトアリ

／ 8 (二〇〇九) あたらよのながめし花に 後撰 あたら

よの月と花をとおなじくは / 9 と讀めるを本哥にてしたて

たり。結句花を雲にみなし / 10 たる也 / 11 (二〇一〇) 濱

ひさぎ 万葉十一 波間よりみゆるこじまの濱ひさぎひさしくなり

ぬ君に / 12 あはずして / 13 (二〇一六) ただ一重いかにや

どらむ山の夕かげ オ 二 世をそむくこけの衣はただ / 14 ひ

とへかさねばうとしいざふたりねむ

(八丁ウ) 1 (二〇一七) 消ずはありとも雪かともみよ 消

ずはありとも花とみましやといふ哥を取 / 2 てこゝには消

ずして花の ■ ■ ■ 疑をのこさず雪と ■ ■ ■ みのの / 3

家づとに論あり。みるべし / 4 (二〇三二) あしのやのな

だの塩焼 オ 三 あしのやのなだの塩やきいとまなみつげの

をぐし / 5 もささできにけり 又 赤人 桜かざしてけふ

もくらしつとを取 / 6 れり / 7 (二〇三三) 高円の尾上の

みや ウ 三 たかまどの尾のうへの宮はあれにけり / 8 (二

〇三三) はつ瀬山花にうき世や 詞書 山にのがれし人になりて

よめる也 / 9 (二〇三四) 大乘院座主 慈鎮ノ事也。新古

今雑上詞書にてもしらる／10 (二〇三八) 花詞書ざかりに大内

におはしまし 此詞書いか／11 (二〇四二) 大炊御門

四 拾芥抄宮城部五十／12 (二〇四三) 花のともにや四

花とともに也。此格あゆひ抄三とも四 玉の緒七十六／13

にみゆ／14 (二〇四五) 波になみそふ山下風のかぜ四

落花のさま也

(九丁オ) 1 (二〇五五) 恋しかるべき春の袖哉五 恋しか

るべき夜はの月哉のべきとは異也／2 心あるべきはつしぐ

れ哉新古今 是と似たるやう也／3 (二〇五八) おのづから

心に秋も有ぬべし 卯花をみて秋の月のけしきの心にうか

／4 べるを、ぬべしとおほめしいへたる。此比の体也／5

(二〇六五) そなれきてウ六 好忠集 みよしのきさ山ぎ

はに立る松いく秋かぜ／6 にそなれきつらん／7 (二〇六

九) 城南寺詞書 鳥羽離宮／8 (二〇八六) 大かたの夏なき

とし八 夏なきとしとおもひける哉／9 (二〇九二) 雲

のいづこウ八 古今深養父／10 (二〇九七) 秋はちかし

朗詠蛩 螢火乱飛秋已近／11 (二〇九八) ゆく鶯かねて雲

路や伊勢物語 ゆく螢雲の上までいぬべくは秋風ふく／12 と

雲につげこせ／13 (二一一〇) みねの秋風木の葉青くは

九 結句いささか聞ず／14 (二一二〇) さぞな木のまの月

はさびしきウ十 事ならんト云事ヲ含テミルベシ

(九丁ウ) 1 (二一二二) 秋のくもウ十 稲ノ事也／2 (二一

二三) 月の氷に水くぐる也 コレハ水クグルト解タルナラ

ンコハタノ事ニテハキコエズ／3 (二一三〇) 夜をかさね

玉江に 夏かりの玉江のあしをふみしだき／4 むれゐるた

づの立そらのなきノ哥ヲトリシナリ／5 (二一四六) こよ

ひしも八十字治川に十二 宇治川の月をながらの橋よりは

みえ／6 まじくおもはる。二ノ句もいかが／7 (二一七六)

あらぬ雲しく十四 稲雲／8 (二一八二) むさしののしもの

をすすき十五 散木二しののをふぶきトアレバココモシカ

アリケン／9 』をは発語也。夫木鹿ノ處ニ此哥を引り。合

みるべし師の語林類葉／10 (二一九五) たちはてて十六 いで

てノ誤也。類句ニいでてトアリ／11 (二二〇三) 無動寺法

印十六 慈鎮也／12 (二二〇四) よむ月は十七 〇。無動寺法

也／13 (二二二四) 心のはては十七 〇。よはすの誤

し山井の水 貫之ノ哥をとりて

(十丁オ) 1 (二二二八) 一むらの昔のすすき十七 貫之君が

植し一むらすすすきむしのねのしげきのべとも／2 なりにけ

る哉／3 (二二三三) 木の本に積るこのは十八 朗詠 拾

遺愚草林雪 林あれて秋のなさけも人とはずもみちをたき

し跡のしらゆき／4 (二二四二) 衰いかにしがの秋霧ほの

ぼの 十訓か著聞ニ此故事有／5 (二二四八) 岩がねや君

がゆかりの^{十九}拾玉五もおなじ。いささか聞がたし／6(一
 二六) 燕子楼中霜月夜^ウ／7(一二八) 行詠雪^ウ 雪
 は霜ノ誤なるべし／8(一二八) 氷れるほどの氷ざるら
 ん かく氷ごとにかくはコホラヌ也／9(一二九) 下
 賤しも雪を^ウ 考べし／10(二三三) かさねても^ウ
 月と花と也／11(二三六) 白川の関^ウ 東の方なれば也
 (十丁ウ) 1(二三四) 遠里小野^オ 住吉の地名 萬葉
 七十三葉 すみのえの遠里小野のまはぎもて／2するこ
 ろものさかりすぎ行／3(二三六・題) 又さきたる^ウ
 誤字あるべし／4(二三七) 宿は雲井に 紫雲に似かよ
 ふ也。拾遺にむらさきの雲とぞみゆる藤の花／5いかなる
 やどのしるしなるらん／6(二三五) そよぎし秋の風
 去年そよぎし秋の風のやうなる風をまつと也／7(二三五
 一) さこそはたれもあかぬ名残は ねをつづけんとてぬと
 いひ、名残をばノをを／8畧したる也／9(二三五) 枕
 にかはす也^ウ 枕にもあやめをすれば也／10(二三五四
 ・題) 泉あり^ヤ 誤字なるべし／11(二三五六) 夏の日を い
 つとてもをししくはあらぬとし月をみそぎにすつる夏の暮哉
 ／12と俊成のよまれしもおもふべし／13(二三六三) いく
 度露のぬれてほすらん いつかちとせを我はへにけんより
 よめる也／14露にとあらまほし

(十一丁オ) 1(一二七七) 春霞しのに衣を^{貫之} 川社しのに衣
 をおりはへてほす衣いかにほせばか七日ひざらん しのハ
 繁き心也／2(一二七九) 老らくのけふこんみちは 俊成
 卿のここに來給ふ道をば残せと也。古今／3桜花ちりかひ
 くもれ老らくのこんといふなる道まがふがにを／4とりて
 かくよめる也／5(一二八〇) かざし折人や 万 三輪の
 檜原にかざし折けんをとりてよめる也／6(一二八九) 山
 人の哥 本文有や可考／7(一二四〇六) 春日山^ウ 都の
 南方也／8(二四〇九) 城南寺 鳥羽ニアル也／9(二行分
 空白)／10恋／11(二四一三) 君があたり^{万葉} 君があたり
 みつつををらんいこま山雲なかくしそ／12雨はふるとも／
 13(二四一六) さてもあらしは あらしの衣を吹返す也。
 あらしの吹返したるは、なつ／14かしき夢はみせぬ也
 (十一丁ウ) 1(二四三三) すくも^ウ しく藻なるべし 後
 撰恋五^{ニノテ} 雨^{ニノテ}／2(二四三四) 雪のあしたも 雲か。
 朝雲暮雨楚襄王の故事なるべし／3(二四四五) わが恋や
 このよの関と^を 二ノ句考べし／4(二四四六) もにすむむ
 し われからト云事／5(二四四七) 泊瀬川^{万葉} 泊瀬川
 んでこす波の云々トアリ／6(二四五九) こはたのみねの
 遠のしら雲 夜の恋に雲はいかが／(7頭注) 羈旅／7(二
 四七二) 露の古郷^ウ 假のふるさと／8(二四七五) 天の

川原 古今に出たる名所也。かりくらしたなばたつめに／
9 やどからん／(10 頭注) 雑部／10 (二五二) 実にも世の
をはり^{十六} 題落たり／11 (一五九七) たねしあれば^{廿二ウ}
古今恋一たねしあれば岩にも松はおひにけり恋をし恋ばあ
は／12 ざらめやは

(十二丁オ) 亨唐音丁籤所録、又分體瑣屑、往往以一題割隸
／二卷殊為叢脞、立名此本考證編排、特為精密、其／所箋
釋、雖不能篇篇皆備、而引據典核、亦勝於註／書諸家、漫
衍支離、徒溷耳目、蓋於諸刻之中、特為／善本、其書成於
康熙壬午、朱彝尊宋犖皆為之序／云、

(十二丁ウ) (空白)

(十三丁オ) 公羊傳注疏攷 未卒業

三、校異

【校異について】

・校合本の略号は、京都大学附属図書館蔵本……(京)、
国立国会図書館蔵本……(国)とする。用字、送り仮名の
差、傍線の有無は校異として取らない。

【校異】

月清集一の後に(国)(京)は「況齋岡本保孝稿」と付す

(二丁オ) 3 つげしト——げしト(京)

(二丁ウ) 5 さらしなやノおもむき——さらしなやおもむき
(国)(京)／6 月に——月よ(国)(京)／9 イウカケニテ
——イヒカケテ(国)(京)／10 そへて也さて秋と夏とを——
——そへて秋と夏とを(国)(京)／13 大御門原——大門原(国)
(京)

(三丁オ) 4 過ぬるか——過ぬたる(国)(京)
(三丁ウ) 6 長夜の^に——長夜に(国)(京)／14 拾遺集にも
——^{拾遺にも}此哥入(国)(京)

(四丁ウ) 1 こしらへたる巢也——こしらへたる(二字空白)
なり(国)(京)／10 うくもの——うくるもの(国)(京)

(五丁オ) 2 ははそにあててもト云也——ははそにあてて二
字空白ト云也(国)／12 季吟ノ抄も——吟ノ抄にも(国)(京)

(五丁ウ) 5 誤解たるにや——誤解したるにや(国)(京)／
10 くもらじ——くもりし(国)(京)

(六丁オ) 2 二の巻——(国)(京)はこの前二行空ける／5
しら波のあとなき方に行舟も風ぞ——しら波のあとなき舟
も風ぞ(国)(京)

(六丁ウ) 2 関を守——關を守(国)(京)／3 左の事也——
古の事也(国)／10・11 院第三度百首 千五百番哥合也——
——(国)(京)にナシ

(七丁オ) 5 玉まくくず——玉まくかぜ(国)(京)／8 万葉

——万葉に(国)(京)

(七丁ウ) 3 涙也——源也(国)(京)

(八丁オ) 1 卷三——(国)(京)はこの前二行空ける／7

夫木春一——夫木春一(京)

(九丁オ) 2 新古今
あり——新古今
ニアリ(国)

(九丁ウ) 9 此哥を引り——此哥ヲ引ク(国)(京)／13

心のはては——心のとては(国)(京)

(十丁ウ) 11 いつとても——いへとても(京)

(十一丁オ) 2 けふこんみちは——けふらんみちは(国)(京)

／3 道まがふがにを——道まがふ(二字空白)を(国)(京)

／5 折けんをとりて——折けんとりて(京)／9(国)(京)

は二行分空ける

(十一丁ウ) 7 この前一行空き(国)(京)／10 この前一行空

き(国)(京)

(十二丁)・(十三丁)(国)(京)にはこの丁を欠く

四、考察

『月清集攷』における岡本保孝の注釈方法は、①本文そのものの疑問の提示、②語句の使用法に関する疑問の提示、③本歌の提示、④歌内容の解釈の提示、⑤語釈、と大きく五つに分けることができる。この方法は『月清集攷』

に先だつ文政元(一八一八)年に成立した『長秋詠藻備攷』にも確認されるものである。

①の多くは「ゝは○○の誤。類句に□□とあり」あるいは「ゝは○○の誤。類句もあやまれり」という型で表される。例えば二丁表十二行目には「月影の残る草なき」という本文に対する注として「草はくまの誤。類句にクマトアリ」とある。同じ注釈形式を持つ『長秋詠藻備攷』には「ゝは○○の誤(也)」の後ろに「類句」ではなく「新勅撰には□□とあり」のように具体的な勅撰集名を示す型が多く確認できるし、『月清集攷』中でも「過ぬたるト玄玉集にあり」「夫木春一にもこもれりとあり」「散木ニしのをふぶきトアレバ」のように他の歌集類の本文を示す場合にはその集名を明示していることから、「類句」は『月清集』諸本内の異同と考えるのが妥当であろう。では、保孝は定家本系統、教家本系統、両系統の混淆本という三系統を持つ『秋篠月清集』のいずれの系統を底本としていたのであるか。江戸期には版本『六家集』が広く流通したこと、保孝もこの版本『六家集』を底本とした可能性は高いのだが、以下、具体的に検討してみたい。

以下「ゝは○○の誤。類句に□□とあり」という表現が用いられる八箇所に対して、定家本系統、教家本系統、元

禄三年版『六家集』（混淆本系統に属する）では本文がどのようなになっているかを示した。なお、定家本系統諸本、教家本系統諸本の校異については、片山享『校本秋篠月清集とその研究』（笠間書院、昭和五十一年）、青木賢豪『藤原良経全歌集とその研究』（笠間書院、昭和五十一年）を参考にした。

①（二丁オ）12月影の残る草なき 草はくまの誤。類句ニクマトアリ

定家本系統諸本・教家本系統諸本・元禄三年版『六家集』——「月影の残るくまなき」

②（三丁ウ）11おくの友舟 くはきノ誤。類句にきトアリ

定家本系統諸本・教家本系統諸本・元禄三年版『六家集』——「おきの友舟」

③（五丁ウ）9まけぬる人や るはとの誤。類句に既にとトアリ

定家本系統諸本——「まけぬと人の」／教家本系統諸本——「まけぬと人や」／元禄三年版『六家集』

——「まけぬる人や」

④（五丁ウ）13誰とみるらん とはかノ誤。類句もあやまれり

定家本系統諸本・教家本系統諸本・元禄三年版『六家集』——「たれとみるらん」

⑤（六丁オ）3龍田山 山は川ノ誤。類句もあやまれり

定家本系統諸本・元禄三年版『六家集』——「龍田川」／教家本系統・日本大学図書館蔵本（九二・一三八・下六八）、片山享氏蔵明応二年奥書本の二本においては「龍田山」、他の諸本は「龍田川」

⑥（六丁ウ）4久かたの月を宮人 をはのノ誤。類句にのトアリ。かぐや姫ノ事ナルベシ

定家本系統諸本——「月の宮人」／教家本系統・日本大学図書館蔵本（九二・一三八・下六八）では「月の^歟みや人」、片山享氏蔵明応二年奥書本では「月を宮人」、他の諸本は「月の宮人」／元禄三年版『六家集』——「月を宮人」

⑦（八丁オ）6雪さえてけふまで花の枝に残れる 残はこもノ誤。類句にこもれりと有

定家本系統・広島大学国文研究室蔵本（大國九一三）では「えだにのこれる」他の諸本は「枝にこもれる」／教家本系統諸本——「枝にこもれる」／元禄三年版『六家集』——「枝に残れる」

⑧（九丁ウ）10たちはてて いでてノ誤也。類句ニいでて

トアリ

定家本系統諸本・教家本系統諸本——「たちいでて」

／元禄三年版『六家集』——「立ち果てて」

以上の八例を確認すると、元禄三年版『六家集』所収の『秋篠月清集』本文は八例中五例『月清集攷』本文と一致し、うち③、⑧では『六家集』本文のみが一致する。しかしその一方で①、②、④、⑤では『六家集』本文は『月清集攷』本文と一致しない。そこで、更に、保孝が底本本文に疑問を呈している箇所をいくつか確認しておきたい。

⑨（三丁オ）4 過來ぬる 過ぬるかト玄玉集にあり。千載過ぬるか夜はのね覚のほととぎす声は枕にあるここちして

定家本系統諸本——「すぎぬるか」／教家本系統・

日本大学図書館蔵本（九二・一三八・下六八）は「すぎきぬる」^{ぬるもイ}、片山享氏蔵明応二年奥書本は「すぎきぬる」、他の諸本は「すぎぬるか」／元禄三年版『六家集』——「すぎ来ぬる」

⑩（六丁ウ）6 月をばいでて^ナ 疑

定家本系統諸本——「月をまちいでて」／教家本系統諸本——「月をば出で」／元禄三年版『六家集』——「月をば出でて」

⑪（七丁オ）11 霞よりつつみかねたる梅がえの^ナ 梅がかの誤なるべし

定家本系統諸本——「むめがかの」／教家本系統・

桂宮本（五一・一・三）・日大蔵本（九二・一三八・下六八）・松平文庫本（二三六・三）では「むめがえの」、他の諸本は「むめがかの」／元禄三年版『六家集』——「梅が枝の」

⑫（八丁ウ）12 花のともによ^ウ 花とともに也

定家本系統諸本——「はなとともにや」／教家本系統・神宮文庫本（三／一四五七）では「花のとふにや」、他の諸本は「花の友にや」／元禄三年版『六家集』——「花の友にや」

⑬（九丁ウ）8 むさしののしのをすすき^{十五} 散木ニしののをふぶきトアレバコモシカアリケン

定家本系統諸本・教家本系統諸本——「しののをふぶき」／元禄三年版『六家集』——「しののをすすき」

⑭（十丁オ）9 下賤しも雪を^{廿三} 考べし

定家本系統諸本・教家本系統諸本——「しばしも雪を」／元禄三年版『六家集』——「下賤しも雪を」
⑨～⑭の全ての場合で元禄三年版『六家集』の本文が当て

はまり、特に⑬・⑭では『六家集』本文のみが『月清集攷』本文に合致する。ただし先にも述べたように元禄三年版『六家集』の本文が全体にわたって完全に一致しているわけではないので、『六家集』版本を底本にしたと断定はできないが、少なくとも定家本系統・教家本系統に属する本ではなく、混淆本系統の本を底本にしたことが想定される。

次に、十二丁表の本文について検討したい。十二丁表に記される文章は、『四庫全書総目提要』の「白香山詩集」の一部である。書き出し部分は「亨唐音丁籤所録」となっているが、この「亨」は『唐音丁籤』の作者である「胡震亨」とあるべきところで、実際に『四庫全書総目提要』ではこの部分に先立つ部分を収載しており、十二丁表に記された部分はその項の終末部分である。項目の途中から、しかも人名を途中で切る形で筆写を始めたとは考えにくいことから、この丁は他の写本から紛れ込んだものと考えられる。保孝には『四庫全書提要存疑』『四庫全書総目異同』という著作があるが、十二丁表の本文はこれらの著作の一部か、その資料として筆写したものであったかもしれない。東大本『月清集攷』は仮綴で装幀がなされておらず、ごく簡素な手控えといった風情であることもあり、十二丁、十三丁は何らかの理由で紛れ込み共に綴じ込まれ、整備されない

ままそこに残されたものであろう。また十三丁表には「公羊傳注疏攷 未卒業」という表題を墨減するが、第一節で述べたように保孝に同名の著作物はないことから、草稿であると考えられる。保孝には『左氏傳注疏考』『穀梁傳注疏考』の二本の著作があり、これに引き続いて『公羊傳注疏考』をものして春秋三伝の注疏に対する注釈書を揃えようとしていた蓋然性は高い。

『月清集攷』の注釈には、助詞などの細部の文法面に注意を払いながら歌意を確定させるものが多い。例えば助詞「も」に着目したものに次の三例がある。

(四丁ウ) 8むさし野にきぎすもつまや^{十六} 伊勢物語の哥

にあたりて、もといへり

(五丁オ) 2雫も色や ははそにあてて、もト云也。はは

そのもみぢしたるによりて

(八丁オ) 3雪は残り花も句はぬ山里に 春たてど花も句

はぬ山里は物うかるねに驚ぞなくといふ本

哥により。しみざれば、二ノ句のも、

おだやかならず

第四丁、第八丁の例では本歌の存在を指摘し、本歌の内容を踏まえているために「も」が用いられていると示す。第五丁の例では「柞原雫も色や変わるらむ杜の下草秋ふけにけ

り」という一首に対して柞原の柞の木が紅葉していることを前提とした「も」の使用であることを示す。第八丁の「しか見ざれば、二の句の「も」おだやかならず」という部分からは、一首の構造を破綻なく論理付けていき理解しようという姿勢が見える。文法的な側面を重視して付された注には他にも、「猶ちらじ 猶 後世のツカヒサマナリ」(二丁オ・10)、「恋しかるべき春の袖哉 恋しかるべき夜はの月哉のべきとは異也。心あるべきはつしぐれ哉^{新古今} 是と似たるやう也」(九丁オ・1) などがある。

また、語の読み方に関しての注も目につく。「はるの川かぜもとほらふ也 もとは下トアリテしたトよむべきを後にしたトヨム事トハ心ツカデもとト改メタルニハアラザルカ」(四丁オ・11)、「夏草のもとも もとは下也^{新古今}」(四丁ウ・9)はその一例であるし、「月の氷に水くぐる也 コレハ水クグルト解タルナラン。コハタノ事ニテハキコエズ」(九丁ウ・2)、「くくるしら浪 これはくくる也。清也。ちはやふるノ哥を誤解たるにや」(五丁ウ・5)では古来歌学書で問題とされてきた語に関して自らの立場を明らかにしている。さらに「み山に消る るはしと有たし」(五丁ウ・1)、「いく度露のぬれてほすらん いくつかちとせを我はへにけんよりよめる也。露にとあらまほし」(十丁ウ・13)では助

詞の用法に厳格な姿勢も見せる。文法面での不審を解決し本文を確定させることで語の関係性を明白にし、一首全体の歌意を確定させるという作業は、現在の和歌注釈の態度からすれば当然の道筋であるが、保孝の注釈態度を象徴する点として興味深い。

しかしその一方で「吹風や空にしらす 風がたれにしらするにか。おだやかならず」(二丁オ・9)のように主体と対象の存在に整然とした関係性を求めるがゆえに一首の解釈を不能にしまっている例も確認され、また「こよひしも八十宇治川に 宇治川の月をながらの橋よりはみえまじくおもはる。二ノ句もいかが」(九丁ウ・5)などは現実的な整合性を重視するあまり、和歌的表現を捉え損ねている。これは「今宵しも八十宇治川にすむ月を長柄の橋の上に見るかな」(146)への注であるが、この歌には「宇治御所にて院の御会に」という145番歌の詞書がかかる。保孝の注は、摂津国の名所である長柄の橋から宇治川の月が見えるはずはなからうというものであるが、もとより良経は「長柄の橋」の語で長久を暗示し院への祝意を込めたに過ぎず、二つの名所の現実の距離はさして問題にはならない。ここまで見てきたように、保孝の注には合理性・整合性を尊重する傾向が強いが、その態度は場合によっては和歌

的世界に現実を持ち込む危険性も抱えていた。保孝の注には良くも悪くもまずは本文に忠実な読みをしたものが多く、細部を疎かにしないその姿勢は、しかし反面、語釈中心の注では取りこぼしがちな面を掬い上げると共に、和歌を解する際最も重要且つ基本的な事柄へと改めて注意喚起するものと言えよう。

以上、岡本保孝の『月清集攷』に関して考察を行ってきたが、『秋篠月清集』、また良経の和歌が江戸期の国学者にどのように捉えられていたかという問題に対して、東大本『月清集攷』の存在は大きな位置を占めると言える。

【注】

(1) ただし、大川茂雄・南茂樹編『國學者傳記集成』第二卷(國

本出版社、昭和九年)「岡本保孝」の項に書名が見えるのみで、現段階で所在は確認されていない。

(2) 「二ノ句もいかか」は、第五丁裏九行目、478番歌に付した注で「八十うち人」について「うちまかせて八十うちといふ、いかか」と「八十」の語を冠することに不審を呈したことを承けているのであろう。

〈付記〉なお、本稿は日本学術振興会特別研究員奨励費(DC2)による研究成果の一部である。

【参考資料】(上) 東京大学総合図書館蔵『月清集攷』第二丁裏、第三丁表／(中) 静嘉堂文庫蔵『永久四年百首考・新撰六帖考』(函86・架4、『岡本況斎雜著』の内) 第九丁裏、第十丁表／(下) 静嘉堂文庫蔵『大鏡系譜・増鏡攷』(函86・架4、『岡本況斎雜著』の内) 第三十八丁裏、第三十九丁表

[illegible]